

巖鼻圖(芸藩通志・国立公文書館蔵)

2 矢賀から広島城下まで

府中大橋の東詰の北側に多家神社の石柱が建っている。石柱には石柱施主正木恒太郎の名前がある。府中大橋をわたって西へ真直ぐに進む。

『芸藩通志』の絵図には一里塚、「行程記」には一里山とあり、「広島札場より一里」とある場所がこの道の両側にあるべきであるが、現在はその場所はどこにも見当たらない。真直ぐ進むと岩鼻にでる。岩鼻は『芸藩通志』の安芸国名勝図のなかに岩鼻図として掲載されている。名勝古蹟

には「東郊官道の傍、一山あり、尾長山東南の尾なり、俗巖鼻(いわはな)とよぶ、全山奇巖重疊す、上古海涯にて、山骨を露せしものと見ゆ、今松樹其上に茂生す亦一奇観なり」とある。かつて旧山陽道は「矢賀村より山を越えて、尾長山下に沿ひ、牛田村に出、川を渡」っていたものが、

毛利氏による城下町建設により干拓がすすみ、岩鼻まで、海であったところが陸地となり、西国街道もその南側を通ることとなったのである。

矢賀村より山を越える道が矢賀峠である。その途中に才藏寺がある。

『芸藩通志』には可児才藏の墓があり、墓のある所を土地の人は才藏領とよび、墓碑面には「かにさい、そ、藤原吉長 生国尾州葉栗郡楽典郷、

千時慶長十八年十一月廿四日」と、才藏の女恒子の書く所を刻し、この地がもと才藏がもっていた山荘の内であり、さらに元禄年間に可児才龍軒の建てた石燈籠もあるとのべている。

岩鼻から山の西側を直進して片河で左折してまた直進する。大内峠への道との交叉点の南側に三本松がある。この三本松は『芸藩通志』に「東

愛宕町、がらく、橋の東、官道にあり、豊太閤、九州より歸陣の時、命じて並木の松を植しめられしが、遺りたるといふ」とあり、「広島新史」

には当時の植樹のあとかと思われ、のち寛政八年(一七九六)六月洪水の時、一株流失し、また一株枯死し、明治四十二年一株枯死し、現在のもの

はことごとく植継ぎの樹というところがある。三本松よりすこし西へ行くと、

現在は暗渠となっている古川と西国街道の交叉するところがある。かつ



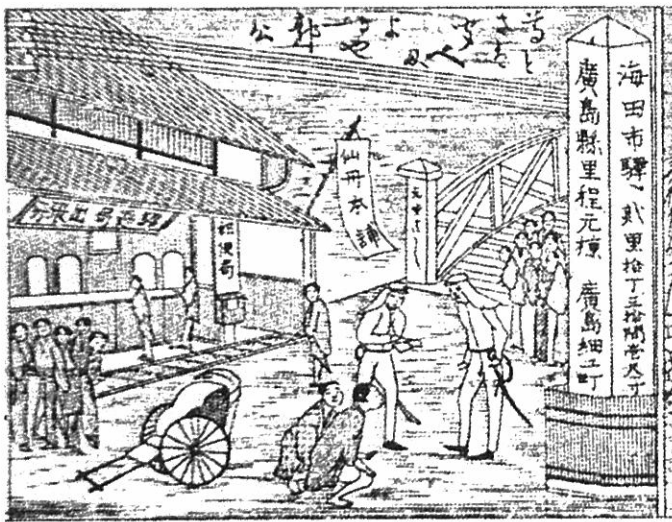
愛宕神社



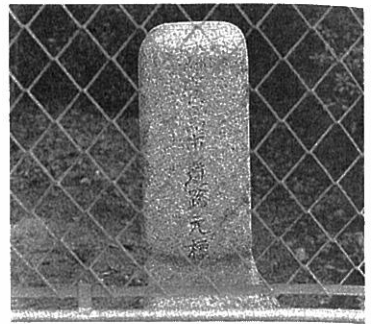
三本松

てがらがら橋のあったところである。昔、がらがら竹をもって橋をつくったのでこの名があるという。損じやすいため板橋にしたといい、長九尺幅三間の橋であった。現在はアスファルトの道で全く橋の名残りはない。さらに西へ直進し、県道東海田広島線をわたって少しいくと北側に愛宕神社がある。「愛宕町東西二町の界にあり、正徳の初、此辺しばしば火災ありしを以て、此祠を勧請し、町名をも改めたという、傍に地藏一軀を置く」（『芸藩通志』）とある。大正三年一月建、正三位勲四等犬養毅の書になる門柱があり、「柝楡共樂昇平日」、「井里威歌大有季」と書かれている。境内に本殿・地藏堂および昭和三十八年建立の三迫初男文学博士による「愛宕神社再建の碑」がある。

愛宕の踏切をわたり直進すると猿猴橋（大正十五年）に出る。猿猴橋の名の由来は明らかでない。毛利氏の時代の城下絵図に既にこの橋がみえるので、この時代からの架橋であろう（『広島市史』）。この猿猴橋から京橋までは古地図では直進できるのであるが、現在は「センチュリーシテイホテル」が建って、かつての一本道が途中で切断されている。京橋町の商店街を通って京橋に出る。京橋は毛利氏の時代、京都朝覲の際の出発点であったことから名づけられたという（『芸藩通志』）。広島城の外郭に京口御門があり、京橋はその道筋にあたる。京橋東詰の北には浄土宗源光院と墓地がある。広島新四国八十八か所の第五七番霊場である。現在の京橋は昭和二年のものである。京橋西詰の南側、京橋川の堤の上に厳島神社がある。創建年代は不詳である。鳥居は西にむいているが、本殿は北にむかって建っている。鳥居には明治三十八年、燈籠に昭和三年、高麗犬に昭和二十四年、明治四十三年橋本町厳島神社保存会中とある。宮島の管弦祭のときこの厳島神社からも船が出たという（横田ミサオ氏談）。京橋をわたり西へ直通して真宗寺院正光寺のところで左折して南に進む。電車通りをわたり、広島総合銀行の前を通り、堀川通りと交叉するところまで直進する。堀川通りの仏壇店横田安樂堂には、大正時代撮影



広島商店買物・仕入案内(広島市公文書館蔵)

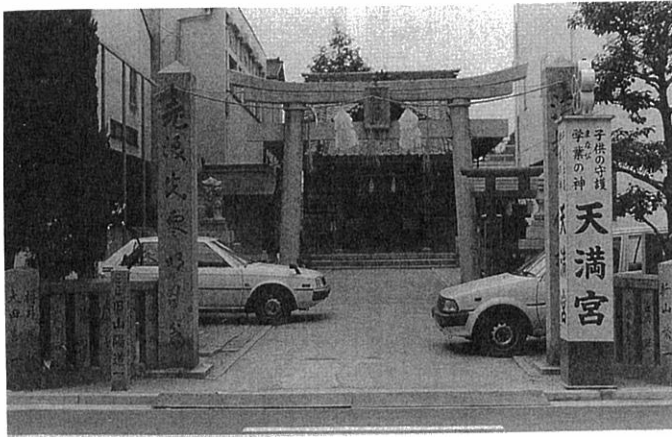


広島市道路元標

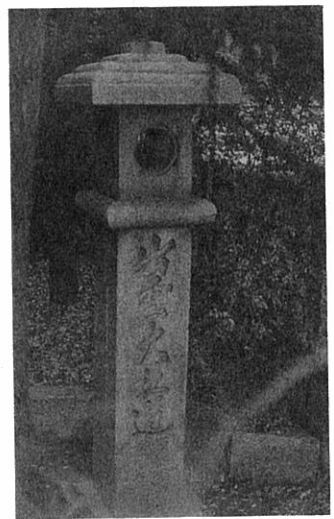
の西国街道に面した写真がある。現在の堀川通りは戦後拡張され、戦前よりも一間ほど後退したという。西国街道を馬車の馬が逃げ出してよく走っていたという(横田ミサオ氏談)。中央通りをわたり、広文館金座街店の前で左折し、虎屋の前で右折して本通り商店街に入る。永井紙店と虎屋との間にはかつて交番があつて、その下に平田屋川があつた。交番の前が平田屋橋で、交番から北は暗渠になっていた。永井紙店の西側の道を北へいくと中の棚である。中の棚には魚市場があつて、そこへの道は石畳の道であつた(藤原ミエ氏談)。

本通りを西へ直進して電車通りをわたり、さらに直進すると元安橋東詰に出る。その北側に石柱「広島県里程元標」「広島市道路元標」がある。江戸時代はここに札場があり、「行程記」には「札場を下ハ古江村の内高須ニ有之一里山迄一里、上ハ矢賀村之一里山迄一里なり、當所往古市市巾なりし故、一里山築所無之壹里ニ當ル所江正保年中札場出来候となり」とある。一里塚にあたる場所であり、そこに高札場があつたのである。

『広島商店買物案内・仕入案内』には中二階の高さほどもある「広島県里程元標」が建っている。札場の少し上、現在の原爆ドームの脇、元安川の左岸にあたる場所に「波戸場」があつた。「行程記」に「広嶋可部迄川船にて四里八丁人壹人船賃六、七分、荷物壹箇り同断、可部可當所江下り船賃人壹人二付十六銅宛定なり、山懸郡高田郡辺可部迄津出なり、可部可當所運送して此波戸場江着船ス」とあり、可部と広島との間を往来する川船の船着場のあつた場所である。元安橋は毛利元康がつくつたから、あるいは元康の邸宅が八町馬場の西にあつた時、細工町をとおり橋に至る道を元康路といったところから、それが橋の名になつたという(芸番通志)。承応の絵図には元康橋と記し、享保の絵図には元安橋とあるので、現在の元安橋になつたのは承応・享保の間であらう(広島市史)。元安橋(天正十五年)をわたると道がS字形に曲がっているが、これは、かつての繁華街のあとである。その北側に「中島勸商場跡」がある。



天満宮



出雲大社道の道標

現在広島市の案内板がある。

つづいて本川橋をわたる。この橋はもと猫屋橋といい、天正年中、猫屋町の豪商猫屋九郎右衛門兼鎮が私財を出して造ったところから橋名としたという。その後太田川本流に架しているところから、これを本川橋と改称した。明治三十年架け換えの時、「バーストリング式鉄製トラス」に改造した（『広島市史』）。現在のものは、昭和二十三年「ポニー・トラス」に改造したものである（『新修広島市史』）。本川橋から直進して坪村家具店の西側の道、寺町通りとの交叉点に出る。寺町通りが雲州街道である。この交叉点に「出雲大社道 須佐大宮へ卅里 すさゝ大社へ五里」という道標が立っていた。文久元年（一八六一）八月に建てられたものであり、現在は空鞆神社の境内にある。この雲州街道は祇園方面から野菜や肥たごを積んだ馬車が榎町の西にあった青物市場へやってきたので、「肥たご道」と呼んだという（本川食糧三戸氏談）。

さらに電車道をわたり直進し天満橋をわたる。天満橋は旧名を小屋新町といったところから、もと小屋橋といったが天明八年（一七八八）町名を天満町と改めるとともに橋の名も改めたという（『広島市史』）。天満小学校南側には天満宮がある。『広島市史』によると、天明八年の勧請といい、明治四十二年十月罹災し、殿中悉く焼失、大正元年九月再建とあるが、現在のものは原爆で焼失以後のものである。さらに西へ直進すると己斐橋に出る。天満橋と己斐橋との間にはかつては福島橋があったが、現在は埋め立てられて、姿をなくしている。己斐橋は己斐村との境にあるのでこの名がつけられた。毛利氏の時代からの架橋であろうという（『広島市史』）。

（赤木 昌彦）